

『後法興院記』（ごほうこういんき）

今年の6月、ユネスコの「世界の記憶」遺産に、千年あまり前に書かれた『御堂関白記』が登録されたことが報道されました。当時の最高権力者であった藤原道長の二十年余りにわたる私的日記です。応仁の乱を始め、何度も焼失の危機をくぐりぬけ、自筆日記が残ったこと自体が奇跡的だとも報道されました。

今回、紹介する『後法興院記』は、室町時代後期、関白・太政大臣を務めた近衛政家（このえまさいえ）の日記です。寛正7年（1466）から永正2年（1505）6月まで約40年間の、今で言う総理大臣の私的日記です。

私たち、信楽に住む者にとってありがたいことは、昔、信楽が近衛家領で、この日記に信楽の地名や有力者の名前が出てくることです。

その日記、今風に書き換えてみると・・・

応仁2(1468)年

- 8月19日 早朝宇治出発、宇治田原で昼食、夕方信楽の小川大光寺に着いた。
- 21日 降り続いた雨が午後2時頃止んだ。此の日、多羅尾玄穎が馬を連れてやってきた。小川の住民も挨拶に来た。
- 22日 小雨の降る一日。江田、神山、長野の住民が挨拶に来た。
- 23日 朝宮と柞原の住民が挨拶に来た。野尻四郎兵衛もやってきて対面した。
- 25日 晴れ時々曇り。蹴鞠を楽しむ。近隣の寺の住職が酒桶を持ってやってきた。それにしてもこのあたりは静かで良いが、何もない寂しいところだ。
- 26日 多羅尾四郎嗣光がやってくる。
- 9月 1日 晴れ、夕方小雨。多羅尾玄穎が連れてきた馬に乗る。蹴鞠もする。住職と対面、その後多羅尾四郎嗣光もやってきた。兩名とも酒を持参。
- 3日 晴れ。来客が多い。京都で起こっている乱のこと等を聞く。此の日多羅尾家に行き、ここで寝た。
- 9日 晴れ。此の日は、朝から歌を作り、山に登り、夕方には蹴鞠をして、一日楽しんだ。
- 10日 晴れ。夕方、蹴鞠を楽しみ、夜には小川城に登って月見をした。
- 13日 向かいの山で松茸狩りをした。
- 21日 西の空に彗星（ほうき星）を見る。不吉だ。
- 25日 小川の天神神社に参拝する。
- 10月18日 夜、地震。
- 20日 宇治に戻る。

約2ヶ月の滞在記です。ほぼ毎日書かれていますが、省略しました。

京都を焼け野原にしてしまった「応仁の乱」の最中、中央の有力者であった近衛政家（後の総理大臣）が信楽にやってきた。地方役人であった多羅尾氏が、神山・江田を含む地元民を順番に送り込み、歓待をした。政家は、多羅尾氏に信楽の統治のことを事細かに指示しながらも、歌を作ったり、馬に乗ってハイキングに行ったり、松茸狩りをしたりして、信楽での日々を過ごしたという内容。この日記から読み取れる確かなことは、今から

550年程前、信楽には、すでに小川、江田、神山、長野、朝宮、柞原が村として存在していたということです。

この『後法興院記』は、「神山」、「江田」という地名が出てくる最古の一級資料ではないでしょうか。



小川城址より天満神社(中心)と大光寺(左上)を望む